

## 日本文学の研究成果を活用した授業の実践報告

Practical report of lessons utilizing the research results of Japanese literature

赤間 恵都子  
AKAMA Etsuko

### 要旨

近年、文学系の学会において国語教育の危機が論議される中、中古文学会では研究を教育に生かすための授業方法の試みが提案されている。本稿は2015年度に設置された本学文芸文化学科の専門科目の中で、研究成果を授業に活用出来ないかと考え、その方法を実践している授業について報告するものである。取り上げるのは、2年次必修科目の「日本文学概論」である。当該科目では、いくつかのテーマのもとに様々な日本文学作品を扱っている。

本稿で報告対象とするのは、『蜻蛉日記』と『和泉式部日記』を扱う授業での試みである。両作品は本文解釈に関わる部分で、研究者の意見が対立している箇所を有している。そこで、研究上の問題点をそのまま授業の課題として示し、学生たちにどちらの見解を支持するかを理由と共に答えさせた。その後、全員の回答をフィードバックして学生たちに共有させ、個々の考察をさらに深めるようにした。

100名規模の講義科目であるが、授業後に学生たちが提出したリアクションペーパーの記述や当該科目の授業評価結果から、積極的に課題に取り組み、主体的に参加したという回答が多く見られ、研究成果を授業で活用することの効果を感じられる結果となった。

### 1. はじめに

平安文学を研究対象とする中古文学会で、ここ数年、「古典の教育・普及」に関するシンポジウムが開催されている。2018年に告示された高等学校国語の新学習指導要領の方針に危惧を感じた文系の16の学会が、2019年8月に共同声明を提出したが<sup>1</sup>、それと連動する形で、2019年度秋季から春秋の4大会にわたってシンポジウムが継続開催されてきたのである。

2020年度秋季の中古文学会で開催されたオンラインシンポジウムは、「これからの古典教育を考える」というテーマだった。パネリストの一人である吉井美弥子氏は、「古典の魅力を発見させること—研究

は教育に生かせるか」という表題で、『源氏物語』若紫巻の垣間見の場面を教材に、日本文学の連続性という特徴を取り入れた授業展開を提案された<sup>2</sup>。それは教科書の単元ごとに作品を個別に読み解いていく従来の授業にない方法であり、古典教育の新たな可能性を示唆するものだった。

研究は教育に生かせるかという問いは、多くの大学教員にとって関心の高い問題であろう。本稿では、本学に文芸文化学科が設置された2015年度からカリキュラムに組み込まれた科目で実践している例を紹介したい。2年生科目なので、2016年度が1年目となり、今年度は実施6年目にあたる。中古文学会のシンポジウムより前から実施していた独自の試みであるが、研究を教育に生かせるかという問いへの一つの答えとして報告する。

当該科目における試みでは、研究者としての教員が直面している課題や研究上の論争となっている問題そのものを授業に組み込み、研究者と同じスタンスで学生たちに考察させてもいいのではないかと考えた。もちろん学問知識も研究経験も未熟な学生たちの考察は、かなり主観的なものになるだろう。しかし、そもそも文学研究の根底にあるものは、研究者自身の作品に対する思い入れであり、作品の魅力をどれだけ説得力ある根拠を示して論じるかが要となると考える。研究対象が文学作品であるゆえに、その論拠も必ずしも客観的なものでなく、本文一つ一つの読み方という主観的な材料が基になるだろう。しかし、それを学問的な手続きに沿って論証していくのが文学研究の醍醐味である。その文学研究の最も面白いところを学生たちにも体験させることができれば、研究を直接教育に生かすことになると思った。

## 2. 当該科目の「日本文学概論」について

本稿の実践報告は、本学教育人文学部文芸文化学科の2年生必修授業「日本文学概論」における2つの試みによる。当該科目は従来の日本文学系学科で定番の、日本文学を対象とした文学史および文学理論を主軸とする講義科目である。一般的には日本文学の始発から近現代に至るまでの文学作品を通覧し、日本人の精神活動の流れを講じる科目だが、本学科には日本文学史の科目を時代別に3科目設定してある。他科目との重複を避け、学生がこの科目を受講する意味づけを具体的に提示できる内容にしたいと考えた。そこで第1講目のガイダンスにおいて、全学生が3年次から取り組み始める卒業研究への道筋を示し、当該科目の開講期である2年生前期で個々の研究テーマを考える契機となる科目として位置づけた。ガイダンスを聞いた後の学生のリアクションペーパーには、卒業研究への道筋が理解できたとのコメントが多く見受けられた。

巷に流通している『日本文学概論』のテキストは使用せず、教材は筆者の専門分野である平安文学を主体として、作品本文と研究論文の主要箇所を部分的に取り上げた資料を作成し用いることにした。「日本文学概論」は必修科目で、本学科の特徴である様々な分野に興味のある学生たち全員を受講対象としている。その中には古典に対して苦手意識を持つ学生も多いことを勘案し、資料には全文現代語訳付きのテキストを使用、古典漫画等も多く活用した。さらに補助資料としてパワーポイントによる映像資料も作成し提示した。毎回の授業の最後にはgoogleフォームを利用してリアクションペーパーを提出させ、次回の授業冒頭で学生たちの質問や感想にコメントする時間を設けた。なお授業は対面とオンラインを同時並行で実施するハイブリット方式で実施した。

2021年度の当該科目の履修生は102名（再履修生3名を含む）、毎時間の授業内容は以下のとおりである。

- 第1講 4月16日 ガイダンス  
 第2講 4月23日 日本文学の歴史  
 第3講 4月30日 作家論1 藤原道綱母（『蜻蛉日記』上巻）  
 第4講 5月7日 作家論1 藤原道綱母（『蜻蛉日記』中・下巻）  
 第5講 5月14日 作家論2 和泉式部（『和泉式部日記』）  
 第6講 5月28日 作家論3 紫式部（『紫式部日記』『紫式部集』）  
 第7講 6月4日 文化論1 夢の文化（古代～中世）  
 第8講 6月11日 文化論1 夢の文化（近世～近代）  
 第9講 6月18日 文化論2 桜の文化（古代）  
 第10講 6月25日 文化論2 桜の文化（中世～近代）  
 第11講 7月2日 文化論3 猫の文化  
 第12講 7月9日 作品論『枕草子』類聚段  
 第13講 7月16日 表現論 現代メディアと『源氏物語』  
 第14講 7月30日 まとめ  
 （第15講 作家論のレポートに振替）

文学研究へのアプローチ方法として、作者の人生を文学作品から考える作家論と、一つの文化テーマを各時代の文学作品から追っていく文化論を中心に据えた。さらに作品論と表現論についても1講ずつではあるが設定した。

本稿で取り上げる内容は、第3講と第4講で扱った『蜻蛉日記』の一場面と、第5講で扱った『和泉式部日記』の冒頭歌をめぐる考察である。いずれも作家論を理解することを目的とした授業なので、最初に作者の人生について解説してから作品の読みに入った。

### 3. 実践報告1 『蜻蛉日記』の「移ろひたる菊」をめぐる

『蜻蛉日記』は10世紀後半の970年代に成立した最初の女流日記文学である。まだ女性が和歌以外の作品を著した前例のない時代に、初めて発表された女流文学であり、後に『源氏物語』にも大きな影響を与えた。

『蜻蛉日記』は上中下の3巻に分かれているが、それぞれの巻には作者が果敢に散文執筆に取り組んでいった道筋が現れている。上巻は私家集的な内容で、結婚の始まりから15年間にわたる結婚生活が多くの和歌を組み込みながら綴られていく。しかし、和歌だけでは表しきれない感情の高まりが徐々に散文表現の連なりを形成し、中巻になると、和歌より散文による心理描写が重きをなしてくる。さらに下巻では、作者の結婚生活への諦念も加わって客観的視点が強まり、夫とのつながりを残す息子や養女に関わる記事を中心に物語的に綴られていく。

本稿で扱う記事は上巻の前半部分にあたり、和歌が重要な働きをしている箇所である。その和歌は道綱母の作として最も有名で、後に百人一首にも採られた歌である。まずは、当該場面について解説する。

藤原倫寧の娘として生まれた作者は、19歳の時に右大臣師輔の3男藤原兼家の求婚を受けて結婚する。摂関家の御曹司との縁談は中流階級の作者の一族にとっては願ってもない縁談であり、最初から断

る選択肢のないものだった。結婚の翌年、男児道綱を出産し、幸せな新婚生活の最中にあったはずの作者は思いがけない夫の裏切りに直面する。ある日、夫が出かけた後、何気なく開けた硯箱の中に、夫が別の女性に宛てた文を発見したのである。作者はその文の余白に、自分の思いを夫に訴える和歌を書き込む。しかし、兼家はその後も何もなかったかのような態度で作者に接する。

それから間もなく、三日間、続けて夫の夜の訪れがない時があった。当時の結婚では、男が女の家に三晩続けて通うという手続きがあり、作者は夫に新しい妻が出来たと判断する。ある時、兼家が「内裏に所用がある」と言って、作者の家から出て行った後を下女につけさせたところ、町の小路通りの家に入ったとの報告を受けた。その時の作者の心理描写を掲げる。

さればよと、いみじう心憂しと、思へども、いはむやうも知らであるほどに、二三日ばかりありて、あかつきがたに門をたたく時あり。さなめりと思ふに、憂くて、開けさせねば、例の家とおぼしきところにもおしたり。つとめて、なほもあらじと思ひて、

なげきつつひとり寝る夜のあくるまはいかに久しきものとかは知ると、例よりはひきつくるひて書いて、移ろひたる菊にさしたり。

「さればよ（やはり思った通りだった）」と、夫の心移りを確信した道綱母は、こんな時にどうしたらいいかわからず思い悩んでいた。2、3日たって、夜明け前に夫が門をたたいたが開けないうちのところ、夫は立ち去ってしまった。夜が明けて、道綱母が詠んだ歌が「嘆きつつ」の名歌であった。彼女はその歌を書いた文を「移ろひたる菊」に挿して夫に贈った。兼家からの返歌は、「なかなかあけない冬の夜と同じくあかない門の外で待つのは辛かったよ」というもので、道綱母の気持ちを汲み取る思いが感じられなかった。そんな状況のまま、兼家の新しい通い所の存在は道綱母公認のものとなったのである。

さて、授業でこの場面の問題点として取り上げたのは、傍線部「移ろひたる菊」である。平安貴族は文を送る際、季節の花や草などと共に贈る習慣があった。求婚の文や見舞いの文など、特に大切な文の場合に行う作法であり、それに用いる植物を折り枝という。文の内容や用紙の色と折り枝との組み合わせによって送り手の教養が示された。この時、夫の浮気を知った道綱母が「嘆きつつ」の歌と共に贈った「移ろひたる菊」はどんな菊で、それにどのような意味が込められていたのだろうか。

従来の研究では、1944年に出版された『蜻蛉日記講義』<sup>3</sup>で、「[うつろふ]は色褪せて萎んでいる意。兼家の心が移っていることをたとえた」と解説されて以来、『蜻蛉日記全注釈』（1966年）<sup>4</sup>から『新編日本古典文学全集』（1995年）<sup>5</sup>まで、代表的な日記文学研究者たちによって、一貫して「色褪せて萎んだ菊」が兼家の愛情の衰えを揶揄するものと解釈されてきた。

これに対して後藤祥子氏は「美しく色変わりした菊」説を提案し、「見事に色付いた菊の枝は、男の心変わりをむやみに責めるだけの凶器としてではなく、家や庭を繕ってひたすら男の訪れを待つ、いじらしい女の閨怨のため息と読めて来はしまいか。」と述べた<sup>6</sup>。美しく色変わりする「移ろひたる菊」を詠んだ、平安和歌の実例を掲げての提案であった。

後藤氏の意見に賛同する研究者<sup>7</sup>も現れ、現在は両説が並立している。「移ろひたる菊」という言葉によって読者が想像する折り枝の実態が、枯れた菊と美しい菊とでは正反対のものであるため、それは作品の読みに大きく関わる問題になっている。以上のように研究界で意見の分かれる「移ろひたる菊」の実態について、学生たちはどちらの説を支持するだろうか。

まずは、古語「移ろふ」の多様な意味について解説した。「移ろふ」には、以下の5つの意味がある。

- ① 他の場所に移る：移転
- ② 盛りの時を過ぎる：衰退
- ③ 心変わりする
- ④ 色あせる
- ⑤ 色づく

このうち『蜻蛉日記』の当該場面の解釈に関わるのは③～⑤である。③の「心変わりする」は、菊の花によって示唆される「移ろふ」心に相当する。すなわち兼家と道綱母の心が女の出現によって変化した意味と解される。そして、その心を喩えた菊の花が④色あせた花なのか、⑤色づいた花なのか争点となる。道綱母が兼家に贈った菊の状態によって、③の心変わりの内容が大きく変わってくるのである。

ここで菊が色づく状態について説明しておく。古代日本の菊は基本的に白い野菊であり、現代、人工的に栽培されている色とりどりに咲き誇る菊ではない。小ぶりの白菊が、花期の終わりに霜に当って赤紫色に変色するのである。移ろう菊の花は平安貴族に賞美され、和歌にも多く詠まれている。ここまで解説したところで、学生たちにアンケートを取った。

Google フォームによる設問とアンケート結果は以下になる。

設問：蜻蛉日記「移ろひたる菊」について、①「枯れて色あせた菊」説と、②「美しく色づいた菊」説、あなたはどちらの説を支持しますか。理由を挙げて答えなさい。〔回答人数は94名〕

- |               |     |       |
|---------------|-----|-------|
| ① 「枯れて色あせた菊」説 | 66名 | 70.2% |
| ② 「美しく色づいた菊」説 | 25名 | 26.6% |
| ③ どちらでもない説    | 3名  | 3.1%  |

今年度は圧倒的に①「枯れて色あせた菊」説が多かったが、その理由は様々で、菊の花が誰の心を表すかによって意見が分かれた。またどちらの心も表さないという意見もあった。以下、学生の回答結果を整理して順に掲げる。

#### ① 「枯れて色あせた菊」説

色あせた菊に兼家の心をたとえ、夫が他の女性に心変わりして自分に対する気持ちが枯れはてたと解するA説と、道綱母の心をたとえ、夫への愛情がなくなって自分の気持ちは色あせて枯れてしまったと解するB説、どちらでもないC説に分かれる。

##### A 説 枯れた菊を兼家の心にたとえたと見る

これが最も多い学生の意見であったが、それぞれの読み取り方によって、道綱母の思いに、苛立ち、怒り、恨み、残念、皮肉、不満、呆れ、やりきれなさ、悲しみ、嘆き等の様々な感情を想定するところに違いが見られた。

そのうち、道綱母が強気な姿勢で兼家をとがめていると考えた回答では、彼女が夫に対してかなり腹を立てている、絶望している、恋心は冷めつつあるという読み方が提案された。一方、道綱母が弱気な姿勢で兼家に訴えていると考えた回答では、夫の自分への気持ちは枯れないでほしいと思ったという読み方が提案された。

## B 説 枯れた菊に道綱母の心をたとえたと見る

道綱母自身の辛い、悲しい、情けない、寂しい、裏切られた、恨みに思う等の感情を読み取る回答である。そのうち、道綱母が強気な姿勢で兼家に皮肉や恨み言をいうと考えた回答では、放っておいたら私も枯れてしまうからという読み方が、弱気な気持ちで夫に訴えたと考えた回答では、私の枯れそうな思いを分かってほしいという読み方が提案された。

## C 説 枯れた菊に兼家や道綱母をたとえない見方

枯れたという状況によって、季節や時間の経過を表した、待ちくたびれて菊も色変わりした、季節の変わり目を思い浮かべた、兼家との関係はすでに枯れた愛だなどの読み方が提案された。

## ② 美しく色づいた菊説

美しく色づいた菊に町の小路の女をたとえるD説、道綱母をたとえるE説、その他の状況から判断して考えたF説が提出された。

## D 説 美しく色づいた菊を町の小路の女にたとえる

夫の新しい女性の存在に気づいていることや、それに対して怒っていることをアピールした、さぞその菊（女性）は美しいのでしょうねという皮肉だという読み方が提案された。美しく色づいた菊が兼家と町の小路の女の恋愛が盛んな状況を表すと考えた回答もあった。

## E 説 美しく色づいた菊を道綱母自身にたとえる

自分のことを見てほしいなら奇麗に色付いた花の方が効果的だから、この菊の花のように美しい私に振り向いてほしいという想いを込めて、という回答があった。また、和歌の解釈をもとに道綱母が涙を流しながら寝ていると考え、涙で美しく色づいた自分を示す皮肉と見るもの、町の小路の女はこの花よりも奇麗かと聞く脅し文句と見る回答もあった。

## F 説 状況から判断して美しく色づいた菊を贈ったと見る

道綱母が怒っているのは夫のことを思っているからで、その嘆きを表す和歌に添える花だからという回答、道綱母は強い女性なので風流や優美さを大事にしたからという回答があった。また、身分の高い夫に枯れた花は贈らないのではないかと、美しい花で兼家の気を引くためだろう、あえて辛い気持ちを隠して余裕を見せている等の回答があった。さらに本文の描写に着目して、いつもより改まって書いているからというものもあった。様々な状況を考察しての回答が興味深かった。

## ③ どちらの説でもない

2名の学生が枯れて色あせた菊と美しく色づいた菊のどちらとも考えられる、あるいはどちらの要素もあるのではないかと答えた。その理由を述べた回答は、道綱母に対する兼家の気持ちは一途ではない（＝枯れて変色した菊）が、道綱母の気持ちは兼家が他の女のもとへいけばいくほど強くなっていく（＝美しく色づいた菊）、兼家に対する嫉妬と愛情の両方を読み取ったというものである。

道綱母が実際に贈った菊はどちらかひとつであり、両説を兼ねることは難しいだろう。ただしこの答えを導くまでに学生が熟慮したことが推測される。また、どちらでもないと答えた学生の回答

で、まだ愛情を感じたので、枯れきってはいないが花びらや葉の先が茶色くなり始めた菊ではないかというものがあつた。これは主語が兼家か道綱母かが明確でないため分類できないが、内容的には枯れた菊の解答に含めるべきものと考えられる。

以上、受講生の解答数が100件に及ぶため、すべての生の回答を載せられず大まかに整理してみたが、大きく分類してもA～Fの6グループとどちらでもない説に別れ、多岐にわたる見解が得られる結果となった。今年度は70%の学生が枯れて色あせた菊説を選んだが、その読み取り方については各自でそれぞれ異なっていることが示された。この結果を学生たちと共有した後のリアクションペーパーでも、自分と異なる様々な意見を知ることが興味深かった、自分が選ばなかった説の方に意見が変わった等のコメントが書かれており、この課題への取り組みの成果が推し量られた。

#### 4. 実践報告2 『和泉式部日記』の冒頭歌をめぐって

『和泉式部日記』は『蜻蛉日記』より30年程後の11世紀初頭に成立した作品である。和泉式部も中流貴族の娘として生まれるが、道綱母とは異なり多くの男性と交渉を持つ人生を送った。その中でも、二人の親王との身分違いの恋愛は世間を大いに騒がせた。一見華やかな恋に生きた女性と思われる和泉式部だが、最初の夫との離縁、父親からの勘当、恋人となった親王たちとの死別、さらに娘の早世という悲運に次々と見舞われ、多くの悲しみを経験した人でもあつた。天性の歌人と称された彼女は自らの人生を受け入れつつ、1500首を越える和歌を残したのである。

『和泉式部日記』は恋愛相手の為尊親王が亡くなった翌年に、弟敦道親王からの誘いを受け入れ、親王の邸に入居するまでの10か月間を記したものである。作品の中では、和泉式部自身を一貫して「女」と呼び、敦道親王と「女」の贈答歌を中心に繰り広げられる二人だけの世界を描いている。

授業で取り上げたのは、『和泉式部日記』の冒頭部分である。日記冒頭は、亡くなった為尊親王との儂い縁を思って嘆き暮らす和泉式部のもとに、1人の少年が訪れるところから始まる。少年はかつて為尊親王に仕えていた小舎人童だった。彼は主人を亡くしてしばらく寺に籠っていたが、今は弟の敦道親王に仕えているという。それを聞いた和泉式部の会話部分から本文を引用する。

「いとよきことにこそあなれ。その宮は、いとあてにけけしうおはしますなるは。昔のやうにはえしもあらじ」など言へば、「しかおはしませど、いとけぢかくおはしまして、『つねに参るや』と問はせおはしまして、『参りはべり』と申しさぶらひつれば、『これもて参りて、いかが見たまふとてたてまつらせよ』とのたまはせつる」とて、橘の花をとり出でたれば、「昔の人の」と言はれて、「さらば参りなむ。いかが聞こえさすべき」と言へば、ことばにて聞こえさせむもかたはらいたくて、「なにかは、あだあだしくもまだ聞こえたまはぬを、はかなきことをも」と思ひて、

薫る香によそふるよりはほととぎす聞かばやおなじ声やしたると  
と聞こえさせたり。

亡き主人の弟宮に仕えているという小舎人童に対して、和泉式部が、それはとてもよかったが、敦道親王とは為尊親王のように親しめないのではと尋ねる。すると小舎人童は、弟宮は親しみやすい方だと答え、敦道親王から持っていくように言われた橘の花を取り出した。

それを見た和泉式部が思わず口ずさんだのは、『古今和歌集』の「五月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」(夏・読み人知らず)の一句だった。小舎人童が親王への返答を要求したので、和泉式部は少し迷った後に和歌を詠んで答えた。

この場面で争点となっているのが、敦道親王が初めて和泉式部の家に使者を送った際に彼女が返した和歌の解釈である。実は『蜻蛉日記』の「移ろひたる菊」の場合と同じように、長年の間、定説となっていた解釈に対して、近年、新たな解釈が提出されている。そこで、授業で、研究上の問題となっている対照的な以下の二説を学生たちに示した。

和泉式部の「薫る香に」の歌の解釈についての二説

- ① 橘の薫る香に亡き兄宮様をかこつけたりなさるくらいなら、あなたのお声をじかにお聞きしたい。兄宮様と同じお声かどうかと。

橘の香にかこつけ故人の追憶を口実にて近づいてくるくらいなら、じかに会いたいと言ってくれたほうが早いという、男の心を見抜いた言い方。女の誘惑の姿勢を表出しながら、実は、和歌はどうせ「はかなき」言葉の慰戯だという立場から、この歌は詠まれている。

(藤岡忠美：小学館『新編日本古典文学全集』1994年)

- ② 橘の花の香で兄宮様との昔を偲ぶのなら、私は郭公によそえて偲び、その声を聞きたい。懐かしい、昔と同じ声をしているかと。

「橘の花」の意図を理解した上で、同じ『古今集』から「昔を偲ぶ」の主題を持つ別の一首「いそのかみ古きみやこの郭公声ばかりこそ昔なりけれ」を引いてみせる。その歌を踏まえながら「声だけは昔のまま」というあの古歌ではないが、懐かしい昔と同じ声をしているか。私は亡き人の声をこそ聞きたいと答えたのである。

(近藤みゆき：角川ソフィア文庫『和泉式部日記』2003年)

二説の争点は、和泉式部の和歌に詠まれた「同じ声」を、為尊親王と兄弟ゆえに同じ敦道親王の声と取るか、亡くなった為尊親王の生前と同じ声と取るかにある。言い換えると、和泉式部が敦道親王と会って彼の声の直に聞きたいのか、それとも、もう会うことのできなない為尊親王の声をもう一度聞きたいのか、つまり、弟宮を誘っているのか、兄宮を偲んでいるのかということになる。

学生たちはどちらの説を支持するのだろうか。Google フォームによる設問と結果は以下のようになった。

設問：和泉式部が最初に敦道親王に贈った歌の意味は①と②のどちらだと思いますか。理由をつけて教えてください。〔回答人数は91名〕

- ① 弟宮の声をじかに聞きたい、兄宮と同じお声かどうかと。  
44人 48.4%
- ② 亡き兄宮の声を聞きたい、昔と同じ声をしているかと。  
47人 51.6%



それぞれの説の選択理由を集約し、以下に箇条書きで示す。

①を選んだ学生が回答した理由

- ・男性の心を見抜ける恋愛経験豊かな人だから
- ・小悪魔的な返しをしそうだから
- ・強い人で、もう気持ちを切り替えているから
- ・弟宮に気持ちが傾いているから
- ・2人は互いに興味があるから
- ・故人にかこつけて近づく相手に対して怒っていると思う
- ・どうせ手紙だけならと考えているから
- ・前後の流れから判断して

②を選んだ学生が回答した理由

- ・まだ兄宮のことを思っているから
- ・弟宮のことはまだ知らないし、好きでないから
- ・和泉式部は一つ一つの恋愛に対して真面目で真摯だから
- ・亡くなった人の声は一番先に忘れてしまうと聞いたことがある
- ・自分の気持ちとして、こうであってほしいと思う
- ・ホトトギスが黄泉の国へ導く鳥だということから
- ・中国の皇帝がホトトギスに生まれ変わったという伝説から

今回は『蜻蛉日記』の結果と異なり、従來說より新説を支持する意見が若干上回った。またその理由については、「移ろひたる菊」の回答ほど複雑ではなかったが、やはり様々な方向からの考察が見られた。

①の「弟宮の声をじかに聞きたい」説では、和泉式部の恋愛豊富な人生から恋愛に対する積極的な考え方や行動力を想定した回答が多く、従来の和泉式部研究と方向性を同じくする。その中で、和泉式部が故人にかこつけて近づく敦道親王に怒っているという回答はこれまでにない解釈だった。

また②の「亡き兄宮の声を聞きたい」説では、恋愛豊富な和泉式部だが、それぞれの恋愛に対して真剣だったと考える点で①説と異なる見方となっている。自分の気持ちとしてこうあってほしいという正直な回答も好感が持てる。またホトトギスの伝承に絡めた回答も考察の幅広さを感じた。

なお、今回はどちらか一方の回答を選ぶ2択にしたため、どちらとも決めかねて最後まで迷ったというコメントもあり、学生たちが時間をかけて課題に取り組んだことが推測された。

『蜻蛉日記』に続いて2回目の課題だったので、リアクションペーパーには、次回の授業で皆の意見を知るのが楽しみだという感想も見えた。また、回答の集計結果を学生たちにフィードバックした後のリアクションペーパーでは、自分と同説を選んでも異なる理由を挙げた学生の意見に納得した等の感想があった。学生は自分の回答を出した後に、他の学生がどう考えるかに興味を持ち、同じ説を選択してもそれぞれ異なる理由があることに関心を持っていた。これは課題を2回、実施したことでより明確に表れた成果だったと考える。

授業のまとめとして、日記文学における和歌の解釈は、詠み手である作者をどんな人物と見るかによって変わり、また作品をどう読み取るかによっても変わる。文学作品はどのように解釈しても構わないが、研究対象として扱うときは、自分の読み方に対してより説得力のある論拠を示すことが必要であることを述べた。

## 5. まとめ

「日本文学概論」で実施した試みによって、学生たちが得たことは何だろうか。最後の授業評価アンケート結果を見てみると、当該科目の授業で得たこととして最も多かった回答は基礎的知識（67%）と専門的知識（66%）であったが、新しい考え方・発想（32%）や、学ぶ楽しさ（28%）を答えた学生も思った以上に多かった。アンケート未回答者も多いので、受講生全員の評価と言えないが<sup>8</sup>、積極的に授業に参加し、課題等に取り組み、主体的に学ぶことができたかという質問に対して、「よく出来た」「ある程度出来た」が合わせて95%に上った。ここには研究課題に取り組んだ今回の授業の成果が表れていると考える。その結果、授業への満足度も「かなり満足できた」「まあまあ満足できた」を合わせて95%の高評価を得た。

記述回答にはリアクションペーパーの効果を挙げる学生が多数いた。授業で考えた自分の意見と他の学生の意見を共有することで、互いに新たな発見をし合うことを興味深い、楽しいと答えていた。必修授業で古典を扱うことについて当初は不安もあったが、「とっつきにくい古典の物語を面白いと感じさせてくれた」という回答があり、大変うれしかった。

学生には自分自身で考えて答えを導き出し、他の意見を聞いてさらに考察を深めていく、その研究課程の醍醐味を片鱗ではあるが体験してもらったのではないかと考える。実は、2回の課題の回答理由の中には、高校の時に授業で習ったからという答えがあった。教科書の指導書は定説に従っているので批判すべきではないが、大学では教わったことを鵜呑みにするのではなく、自分自身で考えることの大切さ、定説を覆す痛快さを知らせたいと思う。その点、『蜻蛉日記』の時より『和泉式部日記』の方が新説を支持する回答が多かったのは、従來說に囚われず、自分で考える姿勢が養われたためではないかと考えた。

研究界で定説とされ、長年通用してきた見解に対して異を唱えることは専門分野の研究者にとっても難しい。しかし、それは新たな研究の糸口を見つけ、研究を発展させるために必要なことである。

今回の授業で扱った課題については、女流作家の作品であることがキーポイントの一つではないかと考える。2つの課題では、いずれも従來說を唱えた研究者が男性で、新説を提唱したのが女性研究者だった。研究者の性別を問題にするわけではないが、女流文学を女性の立場に立った視点で見直すことで見えてくるものがあるのではないだろうか。今回の授業成果を通して、研究未経験者の学生であっても、むしろ事前の知識がないからこそ素直な心で1000年前の作者の気持ちに寄り添う解釈が出来る可能性を感じた。

学生たちの回答は、作品を深く読み込んだり従來說を十分に検討したりした上での見解ではない。それでも自分なりに考えて答えを導き出したこと、また他の学生の回答を知り比較検討する視点を得たことで、卒業研究を目指す学生として学問の入口に立てたと考えていいのではないだろうか。学生たちの今後の成長に期待したい。

1 声明文は、「『高等学校国語・新学習指導要領』に関する見解」として、『中古文学』第104号（2019年11月）以降の号に掲載されている。その内容は、新学習指導要領において、国語科の科目を「論理的な文章」「実用的な文章」を扱うか、「文学的な文章」を扱うかで区分する基準を批判し、今後の中・高等教育において「人文知」が軽視され衰退することのないような運用を要求するものである。

- 2 シンポジウムの内容は、『中古文学』第107号（2021年5月）に収録されている。また2021年3月に、久保朝孝編『危機下の中古文学2020』が総勢42名の執筆者の論文を掲載して武蔵野書院から出版されたことも付記しておく。
- 3 喜多義勇『蜻蛉日記講義』1944年 至文堂
- 4 柿本奨『蜻蛉日記全注釈』1966年 角川書店
- 5 木村正中・伊牟田経久『新編日本古典文学全集』1995年 小学館
- 6 「秘められたメッセージ『蜻蛉日記』の消息の折り枝―『国文目白』第30号1994年1月／『平安文学の謎解き―物語・日記・和歌』2019年 風間書房 所収
- 7 武田早苗「「移ろひたる菊」の意味するもの―「うつろひたる菊にさしたり（蜻蛉日記）私見―」（『和歌 解釈のパラダイム』1998年 笠間書院）、赤間恵都子「白菊のメッセージ『蜻蛉日記』と『源氏物語』から―」（『十文字国文』第9号 2003年3月）
- 8 授業評価結果は、今年度から本学の学内ネットワークに導入された総合教育システム UNIVERSAL PASSPORT の授業評価アンケート（2021年7月31日～8月12日に学生各自で回答）による。回答者数は2年生99名中61名で、回答率は62%だった。

『蜻蛉日記』『和泉式部日記』の本文引用は『新編日本古典文学全集』（小学館）による。